

## 初期『中論』注釈書の研究

大正大学大学院 仏教学研究科仏教学専攻 研究生

学籍番号 1507509

安井光洋

### 論文要旨

本稿は初期中観派に位置づけられる *Mūlamadhyamakakārikā* (MMK) 注釈書の *Akutobhayā* (ABh) と青目釈『中論』(『青目註』) に関する研究である。まず ABh であるが、テキストはチベット語訳のみが現存している。内容としては全体的に MMK の偈頌に最低限の語句を補う程度の注釈しか施されておらず、他の注釈書と比べて極めて簡素なものとなっている。そのため先行研究によっては「あまり有用でない」とするものもある。

この注釈書をめぐると最大の問題点は、この注釈書の記述と一致する記述が他の注釈書において広く認められるという点にある。これについては数ある MMK 注釈書群の中でも ABh が最古のものと考えられていることから、後代の注釈書が ABh を引用しているということになる。しかし、それらの記述について ABh という名称はおろか、それが引用であると明記されることさえなく使用されているのである。そして、ABh と最も共通した内容を示しているのが『青目註』である。

『青目註』も ABh と同様に多くの問題を孕んでおり、何よりもまず著者である青目なる人物が何者であるかが全く明らかになっていない。また『青目註』以外に彼のものとされる著作は現代に伝わっていない。この人物に関するほとんど唯一といってよい手がかりが『青目註』の訳者である鳩摩羅什の弟子僧叡による同書の序文である。それによれば『青目註』の原典に見られる注釈が不完全なものであったことから、漢訳者である鳩摩羅什(羅什)がその内容に修正を加えたとされる。このことから『青目註』に示される解釈については青目の他に、羅什の解釈が反映されているという可能性も想定しなければならない。

また、この青目については羅什の師である *Vimalākṣa* であったという仮説がいくつかの先行研究によって支持されている。そうであるとすれば、『青目註』の成立地については *Vimalākṣa* が活動していたとされる中央アジア周辺であるという可能性が想定される。

### <先行研究>

以上のように、その成立背景が未だ明らかにされていない両注釈書の関係性をめぐって、先行研究によって様々な仮説が提示されている。まず丹治 [1982] は ABh と『青目註』が本来同一のテキストであったという仮説を示す。そして、両者の現行テキストに見られる差異はすべて羅什によるものであるとする。

次に Huntington [1986] は ABh が段階的に成立し、『青目註』はその原初段階のテキストに基づいているとする。また、同論文には ABh の校訂テキストも付されている。

その他には白館 [1991] が挙げられる。同論文は ABh が第 18 章において煩惱・所知の二障、有余依・無余依の二涅槃、そして人・法の二無我について言及されていることから、ABh が『菩薩地』の影響下にあったとする。そして、従来は最古の注釈書とされてきた ABh

を *Buddhapālita-mūlamadhyamaka-ṛtti* (BP) の後に成立したという見地に立つ。

これらの先行研究のうち、Huntington [1986] および三谷 [2001] は ABh の現行テキストの成立を BP および『青目註』以降と見る点で共通している。しかし、これらの仮説はいずれも各テキストの全体に渡った比較に基づくものではなく、部分的ないし限定的な視点から論じられたものである。また考察の資料として挙げられている例も決して十分であるとは言えない。

よって本稿においては MMK 諸註釈における ABh の使用と、ABh と『青目註』の比較という 2 種の観点から「中観派における ABh の位置付け」と、『青目註』独自の解釈の淵源について考察を行った。

### <第 1 章>

本論の概要としては、まず第 1 章で BP の他に *Prajñāpradīpa* (PP)、*Prasannapadā* (PSP) といった注釈書に共通して ABh の記述が使用されている例を挙げてそれを類型化し、後代の注釈書がどのような意図に基づいて ABh を使用していたかを検討した。その結果、BP 以降の注釈書では ABh の注釈の中でも、他学派の教理に関する記述が引用される傾向があると確認された。このことから後代の注釈者たちが共通して ABh を引用する際には MMK 中で他学派によって主張される教理の典拠として用いているという結論に至った。しかし、その引用方法は ABh の記述をそのまま引用するというものではなく、各注釈者によって注釈の論証性を高めるために適宜内容が補完されるというものであった。そして、これにより ABh を淵源とする中観派における MMK 注釈の流れとその伝承過程を推測することができた。

また、そこでは Bhāviveka と Candrakīrti という思想的に袂を分かち、自立論証派と帰謬論証派という二派に分派したとされる両者の間でも対立は認められず、むしろ後者が前者による情報の更新を踏襲している例が確認された。このことから、中観派においては自立論証派と帰謬論証派という思想的対立を根拠とする分派とは別に、中観派の中で ABh に基づく MMK 解釈の伝承が存在していた可能性が考えられる。

他方、『青目註』はそれらの例については共通点がほとんど見られなかったが、第 1 章第 2 偈、第 3 偈をめぐる解釈については唯一 ABh と共通する解釈を示していた。そのため、『青目註』は BP 以降の注釈書とは異なった形で、ABh を淵源とする MMK 注釈の伝承を形成していると言えるだろう。

### <第 2 章>

第 2 章では、ABh は段階的に成立したテキストで、その原初段階では現行テキストに見られる譬喩がすべて存在しなかったという Huntington [1986] の仮説に基づいて検証を行った。その結果、実際には ABh に見られる譬喩の多くが他の注釈書においても用いられていることが確認された。さらに、それらの例については必ずしも先行する注釈書に倣って踏襲するというものばかりではなく、各注釈者たちの判断によって独自に引用されている例も見受けられた。このことから Bhāviveka や Candrakīrti がそれぞれ先行する BP、PP に基づいて ABh を引用するのではなく、個人の判断で ABh を引用するという例を確認することができた。また、それとは逆に第 1 章と同様、PP に示される発展的な記述が PSP に

踏襲されているという例も確認された。

### <第3章>

第3章では、MMKの中に現れる反論者の想定をめぐる解釈の相違について論じた。これについてもやはり『青目註』のみが独自の解釈を示しており、それ以外の注釈書ではほとんどの例で解釈が一致していた。それについては Nāgārjuna の主張であるか、あるいは反論者の主張であるかの判別が困難な例においても同様であり、このことから論者の想定についてはいずれの注釈書も ABh の解釈に則っていると言える。

他方、『青目註』の示す独自の解釈については羅什による漢訳上の方針に基づいているという可能性をいくつかの根拠とともに論じた。その根拠とは①偈頌を分割して注釈しない。②MMK 全体を見通した上での文脈を整合させる。③本文中に現れる反論者を、特定の学派に当てはめない。という3種である。

### <第4章>

第4章では『青目註』における涅槃と戯論に特徴的な用例が見られることから、それをきっかけとして同書の独自性を論じた。まず、涅槃について『青目註』では「生死即涅槃」という表現が見られた。これは MMK に説かれる「輪廻には涅槃といかなる区別も存在しない」という解釈に基づきつつも、諸法実相という独自の思想の上に立脚することで否定的に表現される MMK の涅槃を、肯定的に表現しようとする羅什の解釈が加えられているという結論に至った。さらに、『青目註』では ABh の涅槃解釈に基づきつつも、より整合するよう内容を改めているという例も確認された。

また、戯論については愛論、見論という他の注釈書には見られない解釈が『青目註』では見られたが、それはパーリ文献の *papañca* に類似した用例が見られることが確認された。さらに『青目註』は他学派の説く教理を「戯論である」と排斥するという独自の用法が見られることから、同書では反論者の主張を退ける際の定型句として戯論を用いていることが分かった。

### <第5章>

最後に第5章では『青目註』、ABh の他に『十二門論』を加えた三者の比較を通じて、『青目註』に示される解釈の独自性を考察した。そして、『青目註』が ABh の内容を引用しつつも、ことばにまつわる独自の言及を随所で加えているのに対して、『十二門論』ではことばに関する言及がまったく見られなかった。このような相違についてはその冒頭に説かれる両書の述作動機に起因することを論じた。

さらに『青目註』では MMK の中心的教理である空について、教説として言語化することの危険性を常に考慮しながらも、それを世俗のレベルにおいて言語化された問答という形式によって論証しようとしていることが分かった。また、そこには MMK で否定的な表現によってのみ説かれる教理を、肯定的な表現を用いて形を与えることで明示しようとする羅什の影響が考えられた。そして、それによって羅什は否定されるべきものをことばとして可視化、顕在化させ、問答という形式において「戯論である」あるいは「ことばがあるのみ」と否定することで空を論証しようとしているという結論に至った。

<結論>

上記の考察の結論として、まず ABh については、後代の注釈書における引用方法を鑑みるに、Buddhapālita、Bhāviveka、Candrakīrti といった中観派の論師たちはこの ABh という注釈書に対して、1つの確固たる典籍という認識を持っていなかったのではないかと考えられる。そして、中観派（Buddhapālita は自称していない）という学派の中で所依の論書である MMK を伝承していく際に、MMK の偈頌に付随して示される「覚え書き」、もしくは不特定の先師による「講義ノート」といった位置づけだったという結論に至った。

そのため、Buddhapālita をはじめとする中観派の論師たちは、MMK を注釈する際にそれぞれ自分自身の確固たる解釈がある場合にはそれを述べ、それ以外の他学派の教理が述べられている箇所などについては先師から伝承されてきた ABh を、中観派における伝統的解釈の典拠として適宜用いていたと推察される。また、その際には第 1 章で論じたように、そこに示される語彙などについて補足可能な情報を保持していれば各自それを補足し、MMK 注釈の法流を形成していったということになる。

よってその段階では Nāgārjuna 自注という伝承だけでなく、*Akutobhayā* という名称も存在しておらず、いわばパブリック・ドメインの引用自由な素材として中観派の中に流布していた可能性が高い。各注釈者が書名はおろか引用である旨さえも明記しないのはそのためだろう。少なくとも Candrakīrti までは ABh の自注説と書名を認識していなかったと考えられる。

しかしながら中観派の思想史における ABh の位置づけは必ずしも低いものではなかったであろう。むしろ偈頌という形式上の制約が存在する MMK のテキストを注釈する際に、ABh という先行する注釈書の存在は後代の注釈者たちにとっては大いに有用なものであったと考えられる。それは「問う／答える」という 2 語によって判別される、MMK における論者の想定について、ほとんどの場合いずれの注釈書も ABh の解釈に則っていることから推察できる。

また、以上を踏まえて先行研究による仮説を再度検討すると、まず白館 [1991] の ABh を BP の後に位置づける仮説は極めて可能性が低いと言えよう。次に三谷 [2001] であるが、同論文による ABh はチベット語訳の際にその名が冠せられ、Nāgārjuna の自注として権威づけられたという可能性は上記本稿の仮説にも沿ったものであるが、ABh がチベット語訳の際に Klu'i rgyal mtshan によって PP、PPT を適用して諸註釈の解釈統合の意志の現れとして成立したという仮説は首肯しかねる。実際 PP には ABh の注釈を引用しつつ、さらに発展させるという例が上記の論考により複数確認されている。

そして、Huntington [1986] による ABh の譬喩が原初段階では存在しなかったという仮説については本稿第 2 章において批判的に検証したが、現行 ABh の成立以前に Indic Source を想定するという同論文の見解は考慮に値する。本稿においても、ABh が当初は確固たる典籍としての形態を取っていなかったという見地に立つ以上、その内容には流動的な「緩さ」があったと考える。しかし、譬喩表現の有無を以て現行テキストの成立を『青目註』、BP 以後に設定する点については支持しない。ABh が青目（あるいは羅什）や Buddhapālita の基へもたらされた時にはすでに現行テキストの形態がほぼ出来上がっていたと考えられる。

他方、『青目註』であるが、やはりこの注釈書についてもこの「覚え書き」、「講義ノート」としての ABh の延長線上にあると考えられる。つまり Nāgārjuna 以後、鳩摩羅什以前のどこかの時点で伝承されるようになった ABh の原典がインドから中央アジアを経て羅什の手に渡ったということである。

しかし、それはインドで成立したそのままの形で伝えられたのではなく、あくまで MMK に付随して示されている伝統的解釈という性格上、その内容は可塑性の高いものであり、伝播過程の長い旅路において様々な加筆、訂正が施された可能性が高い。青目という名前が付されたのもその伝播過程においてであろう。そして、そのような過程を経て成立した『青目註』が羅什の基へ伝えられ、彼の手によって漢訳の際に上記で論じたような分割された偈頌の統合や、諸法実相といった独自の思想に基づく加筆が行われて現在のテキストが成立したと結論付けた。以上の考察により ABh と相違する部分についても羅什による加筆という可能性とは異なる可能性が検討可能となる。

以上が本稿の概要である。